

万年筆あれこれ

大津 隆文

先日探しものをして机の引出しをひっくり返していたら、万年筆が四本出てきた。懐かしい思いがした。すっかり使わなくなって何年経つのだろうか。

初めて万年筆を手にしたのは中学校へ進学した時だ。親から入学祝いとして受け取った時は、少し大人になったようで本当に嬉しかった。その後英語では fountain pen というと知って、成る程と思った。

実際によく使うようになったのは就職してからで、パイロット万年筆でペン先に一文字あるのを内心誇らしく思っていた。苦い思いをしたのは胸の内ポケットに挿していたインクを漏らしてしまい背広を台無しにしたことだ。

当時ボールペンが始めていたが、まだ広く認知されておらず、後輩から就職時に提出する保証書のサインが万年筆ではなくボールペンでもいいでしょうか、と相談を受けたことがあった。

四本の中で一番のお気に入りにはモンブランの万年筆。これは四十年近く前ニューヨークから帰国する時、秘書から饞別にもらった品で、少し太めで持ち心地がとても良い。大切なサインをする時や、年賀状にひと言書き足す際に使っていたが、いつの間にかお蔵入りしてしまった。

最近ペンをよく目にするのはトランプ大統領がサインするシーンだ。しかしあれは万年筆というより芯がフェルト製のサインペンのようだ。

いずれにしても重要な署名は万年筆でして、プロッター（吸い取り紙）をぐるんと押すというのがサマになるような気がするの、単なる郷愁であろうか。

最近聞いた娘の話。小学生の孫の鉛筆の持ち方が良くないので、学校の先生に相談したとのこと。先生は、ご家庭での指導が第一ですが、学校としても協力させていただけます、ただし本人にとっては辛くストレスも大きいことでしょう、今はペンを使うことも多いですが、これから中学、高校と上がっていくにつれ、書くよりタッチすることの方が多くなっていくことも考慮してご判断されてはどうでしょうか、と述べられた由。本当に世の中は変化し続けている。